



# 広報

京都大学大学院医学研究科人間健康科学系専攻  
 京都大学医学部人間健康科学科



平成 26 年度医学部人間健康科学科新入生歓迎式

## 目次

○研究者倫理について考える	専攻長 椎名 毅… 2	看護科学コース	助教 宮田 千春…12
○退任等挨拶	元看護科学コース 准教授 赤澤 千春… 3	看護科学コース	助教 西村亜希子…13
元看護科学コース	准教授 廣島 麻揚… 3	リハビリテーション科学コース	助教 小川 真寛…14
元看護科学コース	助教 久保田正和… 4	○第 26 回 (2013 年) 健康科学市民公開講座 ……15	
元看護科学コース	助教 鈴木 和代… 5	○2013 年度オープンキャンパス ……16	
元リハビリテーション科学コース	助教 山田 実… 6	○人間健康科学系専攻から	
元安寧の都市ユニット	特定助教 孔 相権… 6	博士が 12 名誕生しました…17	
○新任等挨拶		○人間健康科学系専攻・人間健康科学科	
看護科学コース	教授 田村 恵子… 7	平成 26 年度入学試験結果及び	
看護科学コース	准教授 西垣 昌和… 8	平成 25 年度修了・卒業者数…27	
看護科学コース	准教授 古田真里枝… 9	○平成 25 年度卒業生の進路調査結果…29	
検査技術科学コース	准教授 上久保靖彦…10	○人事異動…30	
安寧の都市ユニット	特定准教授 小山 真紀…11	○日誌…31	
		○あとがき…32	

## 研究者倫理について考える

椎名 毅

平成 16 年に国立大学が法人化して 10 年が過ぎ、グローバル化、少子高齢化の進展などの様々な社会環境の変化のなかで、今後、国立大学が、持続的な競争力を持ち高い付加価値を生み出すにはどうすべきかが問われています。このため自主的、自律的な改善・発展を促すため、文科省が打ち出したのが、いわゆるミッションの再定義で、看護学・医療技術学系は、この 3 月に各国立大学の強み、特色・社会的役割が明確に示されました。京都大学（人間健康科学系専攻）は「世界トップレベルの先端医療技術の開発および臨床フィールドにおける実践の追求を通じて、世界レベルの研究を牽引する研究者を養成」とされており、今後このミッションに沿った改革が期待されています。これまで多くのノーベル賞受賞者をはじめ多くの世界的な研究者を輩出してきた京都大学にとって、このようなリーダーたる研究者の育成は、主要なミッションであることは、自他ともに認めることと思われませんが、もっと幅広く大学での研究の役割は、研究開発を通して豊かな社会の実現に貢献することにあります。

研究者育成という点では、学生に対して、基礎知識と技術や研究手法の習得、さらに応用力、発想力の涵養など研究に必要な能力を高めるための教育を行います。研究者としての倫理観についてはどうでしょう。私が学生の頃は、研究室で指導教官や先輩からの研究指導の中で、自然と身についたように思われます。しかし、昨今、研究者倫理に反した事件が、世間を騒がしており、改めて、研究者倫理の教育が重要なことを思い知らされます。

そもそも倫理とは何かと言えば、人として守らねばならない道、善悪・正邪の判断において普遍的な規準となるものを指しますが、その基準はコミュニティに依存したものとすることが多いようです。すなわち、企業倫理と言えば、企業活動上守るべき基準であり、多くが法的遵守や環境保護などを意味します。これに対して、研究者倫理とは、研究者として守るべき基準であり、各大学、研究機関などで規定を示しています。<sup>1) - 3)</sup> その中でも、分かりやすい産総研の規定では、以下の正義性、社会性、高潔性・誠実性であるとしています。<sup>1)</sup>

正義性： 一人の人間として人類に貢献する姿勢を尊重する

社会性： 社会の一員として責任ある行動をとる

高潔性・誠実性：研究者として正直で恥じることのない行動をとる

倫理規定は、道徳と同様、守るべき基準ではあっても法律ではないので、破っても必ずしも法的な罰則を科せられないものです。しかし、多くの大学の研究は公的研究資金で行われており、社会や国からの期待が込められたもので、大学での研究者は、研究を行いその成果を社会に還元する使命を担っています。このため、科学者・研究者が自律的に社会への責任をはたしていく上で、この倫理観の共有は不可欠です。特に、高潔性・誠実性からの逸脱した行為として、データの捏造、偽造、剽窃などを行うと、研究者コミュニティ内部のみならず、瞬く間に社会批判を増幅させ、大きな、ペナルティを受けることは、最近の事例を見ても明らかです。

くれぐれも、教え子が研究者倫理について、教えてもらわなかったもので、してはいけないこととは知らなかったなどと言わないように、研究者倫理の教育も忘れないようにしたいものです。

### 参考文献

- 1) 産総研ホームページ 研究者倫理について
- 2) 筑波大学ホームページ 知の品格（研究者倫理）
- 3) 京都大学ホームページ 京都大学における研究活動上の不正行為の防止に関する規程

## 退任のご挨拶

赤澤 千春

この度、3月31日をもって京都大学大学院医学研究科人間健康科学系専攻看護学コースを退職いたしました。現在は大阪医科大学看護学部でお世話になっております。私は、昭和56年に京都大学医学附属病院に入職し、平成12年より京都大学医療短期大学部に移動となり、以後保健学科、人間健康科学科、大学院と気が付けば33年になっておりました。在職中は病院をはじめ大学等多くの方々のご支援を賜りましたこと心より感謝申し上げます。

短大に着任したころは、「短大から大学へ」ということで、教育だけでなく研究業績にも力をいれなければなりませんでした。このころ大阪兵庫では看護系大学が次々と開学しており、短大に来る学生の学力も従来より厳しい状況となり、教育に時間を取られる状況でありました。大学から大学院に移行したころは個人研究費もほとんどなく、研究を続けるには外部資金を獲得していかなければならず、そのためには社会に還元できる研究テーマを探し、それが相談室でリンパ浮腫外来を始める契機にもなりました。私はいくつかの研究テーマを持っております。その中の一つである臓器移植看護は京都大学であったからこそ取り組もうと思った課題でもあります。病院に勤務しているときから小児外科で先天性胆道閉鎖症の子供たちが年を経るごとに肝硬変が悪化していく中で、肝臓移植という医療が始まり、いろいろな賛否両論はありますが、移植を受けたことで元気になっていく様子を見ると、ただ悪化していくのを見ることはつらいことでしたので、よかったねという思いになりました。もう一つのリンパ浮腫は母性看護学に在職していた岡島先生が京都大学医学部附属病院に保健学科の教員が臨床をできる相談室を作ろうとしてくれた結果です。大学などの看護教育が変わると、臨床実践がほとんどなくなり、新規の医療方法には疎くなっていきます。相談室ができたことは、そうした臨床の実践感覚を保つことができる貴重な機会となりました。大阪医科大学でもそのような相談室ができればと考えて準備中です。

さて、ここ数年の大学を取り巻く環境がいろいろな面で厳しくなっていており、その波は京都大学でも押し寄せております。そうした中で、何のお役に立てないままに退職することは心苦しい限りです。しかし、人間健康科学科の先生たちの熱意と努力は尽きることがないように思えますので必ずやよき結果となることと信じております。どうぞ、今後とも人間健康科学科が発展されますよう心より祈念申し上げます。

最後になりますが、本当に長きにわたり、ご指導をいただきましたこと深謝申し上げます。また、今後ともご指導ご鞭撻の程よろしくお願いたします。

## 退職のご挨拶

廣島 麻揚

平成26年3月末で退職させていただきました。短い期間ではございましたが、皆様にあたたかいご支援とご指導を賜りまして、心より感謝申し上げます。

この場をお借りして大変恐縮でございますが、京都大学での経験を2点、述べさせていただきます。

**【すばらしい先生方と学生さんにいただいた、何ものにも代え難い刺激】**

京都大学で得た経験で、一番大きな財産は、やはりすばらしい先生方と学生さんにいただいた、何ものにも代え難い刺激だと思います。大変な状況の中でも学問への興味関心、追究心をいつも皆様持っておられ、私自身楽しませていただくとともに、大変よい刺激をいただきました。心から感謝しております。

また皆様、いつも前向きで、問題解決志向で、そのようなポジティブな雰囲気にも随分刺激を受け、また支えられました。

**【精神看護教育の難しさと、地域や時間を越えたつながり】**

また、精神看護教育の難しさを痛感いたしました。京都市は、特徴としまして、大きな精神科の病院が少ないことがございます。また、看護系の大学が次々できていく状況がございます。そのため、実習病院の確保にとっても困りま



した。

学校では人員削減、教育費の節約も大事な課題になっており、実習指導を担当する教員の確保にも困窮いたしました。

少ない期間ではあっても2週間、しっかり患者さんと向き合っ、精神看護のおもしろさを感じてほしい、もっと学生さんと一緒に病棟で過ごし、十分な教育的支援、学習環境の確保をしてあげたいと思いつながりながら、なかなかできず、悩ましい状況でございました。

これは今後も京都大学の精神看護領域が抱える課題かもしれません。でもこの課題を、変化や成長のチャンスに変えられる力を学生さんも先生方もお持ちだと信じています。

そして、このような状況の中でも、快く実習を引き受けてくださった実習施設の方々とは、地域や時間を越えたつながりを感じました。どこにいても、「精神」というキーワードでつながり、お互い支え合う気持ちをいつも持ち、時間を経てもまた会えば、仲間となれる、そんなつながりを感じさせていただきました。本当に感謝の気持ちでいっぱいです。

最後に、このような貴重な経験を積ませていただき、そしていつもあたたかく声をかけていただき、ご支援・ご指導くださいました細田公則先生、任和子先生、赤澤千春先生、本田育美先生、小西奈美先生、竹之内沙弥香先生、福田里砂先生はじめ、臨床看護学講座の先生方、看護科学コースの先生方、人間健康科学系専攻の先生方、職員の皆様、そして実習等でお世話になりました精神科病院と社会復帰施設の職員の皆様に心からお礼を申し上げますとともに、皆様のご発展を祈念申し上げます。

## 退任のご挨拶

久保田正和

2014年3月末日をもちまして京都大学医学研究科人間健康科学系専攻助教を退職いたしました。京都大学には7年間お世話になりました。入職時は初めての京都、初めての教育、初めての結婚生活と、初めて尽くしでの生活開始となりました。2007年は耐震工事で仮教員棟にデスクがあり、実験は臨床研究棟臨床神経学研究室で行うという特殊な環境でありましたが、常に工事の音がする中で抄読会やミーティングをしたことは、今考えてもなかなか大変な環境だったと感じます。7年前の周囲の姿を思い出すことができないうくらい、京大在籍の7年間は病院を含め周囲のどこかで工事が行われており、いろいろと変わっていきましたので、「発展しているなあ」と感じる毎日でした。

教育研究活動を振り返りますと、教員、職員、学生をはじめ周囲の方々に恵まれましたおかげで、充実した毎日を過ごすことができました。特に木下先生には未熟な私のために快適な環境を整えていただき本当に感謝しておりますし、人との接し方、研究者としての姿勢や豊富な知識量から多くのことを学ばせていただきました。看護学専攻の先生にもいろいろとご教授いただきましたが、看護学専攻の教員でありながら、あまり看護のことを分かっていない自分に看護学の教育研究について教えていただき感謝しております。人間健康科学科は4専攻から成っていますが、看護学専攻以外の先生方の考え方や研究に触れることができる環境は本当に素晴らしいと思います。大半は飲酒の場でお話することが多かったですが、個人的に教育研究に対する考え方を教えていただいたり、時には実験機器を貸していただいたり、他専攻の多くの先生方にも大変お世話になりました。事務の方々には頻りに接する機会がありましたが、ご迷惑をおかけしたと思います。延べ人数が分からないくらい異動が激しかったなという印象は拭えませんが、お世話になった全ての事務の方に感謝いたします。

私は現在京都市内で訪問看護師をしています。原付バイクで上京区や北区あたりを走り回っていますが、とても充実した毎日を過ごしています。看護師の先輩方からは、初心者の方に一からご指導をいただいております、非常に働きやすい雰囲気でありがたく感じています。訪問看護は在宅で過ごす利用者やその家族の健康を見守る仕事であり、緊張の中にも人と深く触れ合う楽しさがあります。5月下旬現在、すでに日焼けで黒くなり汗だくの毎日ですが、体重は減りません。脂肪が減って筋肉のみ増加したのでしょうか。現在は厳しさの中にも楽しく仕事ができているので、これを維持できるよう頑張っていきたいと思っております。

実は研究も継続しています。今後も研究は続けていきますし、大学にもおじゃましていますので、私を見かけましたらお声がけしていただけますと嬉しいです。

皆様、本当にいろいろとありがとうございました。

最後になりましたが、皆様のご健勝とご活躍を心よりお祈り申し上げます。

## 退職のご挨拶

鈴木 和代

薫風に大きな鯉のぼりがなびき、鳥のさえずりが響いています。懐かしさと新鮮さを感じながらケヤキ並木を歩いて、私は16年前に卒業した母校・兵庫県立大学明石キャンパスへ通う日々を送っています。学部生の頃には気付かなかったのですが、安藤忠雄氏設計のキャンパスの趣深さや自然と建物が織りなす調和が、年を重ねた私にはようやく理解できるようになりました。アートとサイエンスのなせる「わざ」を実感している日々です。

私は今年3月の退職までの8年8か月を人間健康科学科でお世話になりました。着任当初は、医療技術短大の学生さんと4年制の保健学科の学生さんが混在する、まさに移行期でした。基礎看護学の助教として、手探りで日々を過ごしていたことを懐かしく思い出します。基礎看護学は1回生と関わる時間が多く、まだ高校を卒業したばかりの学生達の純粋無垢な感性に触れることのできる、幸せな仕事でした。同時に、看護に対する興味や態度を養う土台の時期の教育を任されている責任感を感じながら学生に寄り添う教育を心掛けてきた次第です。私が教員として心がけていたことは、学生の目線に立って「共に考える」ことでした。当たり前のことですが、学生の一番の理解者であること、そして一緒に問題解決をしていく中で「看護の心」を伝えることを大事にしてきました。このような教育観は、私自身が学生時代に受けた教育に根差すところが大きく、さらに講座の先生方から教わったことでもあります。このような教育をさせてもらったことは私の教員人生にとって重要な経験でした。

京都大学で教育と研究に携わったこの年月は、私の人生にとってかけがえのない、濃厚な時間でした。ベッドサイドでの患者さんのケアにやりがいを感じていた私にとって、軽い気持ちで飛び込んだ教育の世界は、予想以上にハードで、私に大きな影響を及ぼした仕事でした。しかし一方で苦勞しながら学んだ多くのことは私にとって血となり肉となり、現在の私へと成長させてくれた糧であったと思います。

在職中は私自身のライフイベントとも重なり、母として妻として家庭を持ちながらフルタイムで仕事をする厳しさ、育児との両立、女性研究者としてのキャリアの悩みなど、いくつもの壁にぶつかり、何度も挫折しそうになりました。その度に、家族や周囲の友人、そして同僚や上司に支えられ、何とか勤め上げることができました。ひとえに皆様のお力添えなくては成し得なかったと感謝しています。

教育や研究では、脳外科の看護師として経験したことをさらに深めることができ、今の私の進路を形作る道筋になりました。病気やけがによりベッド上臥床を余儀なくされる人々が、快適な姿勢で過ごし、快適な移動の支援を受けられるような看護の技術を研究したいと思っています。在職中も定期的な臨床実践や事例研究を通して研究主題に着手していましたが、周囲の熱心な勧めのお陰で、集中して研究成果にまとめたいという気持ちが高まり、三男の出産後すぐに博士課程の受験をしました。縁あって母校の大学院に合格し、大変悩んだ末ではありましたが、思い切って退職して学業に専念しようと決断しました。進学を機に、私の生まれ故郷である神戸に一家で転居し、様々な意味で私の人生にとってのターニングポイントとなりました。今は実際に家庭や育児と学業の両立で、専念するにはやはり努力が必要だと実感していますが、京大での経験を生かし、社会に役立つ成果を出すことに向けて精一杯努力していきたいと思っています。そのことが皆様への恩返しになると思います。そして将来は、ベッド上で苦しむ人々に届くケアを、ベッドサイドで患者さんと共に創り上げていき、看護の仕事に還元できるような研究を行っていきたいと思います。それは、私に多くのことを教えて下さった患者さん達への恩返しでもあり、私なりの心の支えでもあります。今後ともお世話になることがあるかと思いますが、変わらぬご指導をよろしく願います。最後になりましたが、人間健康科学科教職員の皆様のご健康と益々のご発展を心より願っております。

## 退職のご挨拶

山田 実

平成 26 年 3 月末日をもちまして京都大学大学院医学研究科を退職しましたので、ご挨拶申し上げます。京都大学では約 6 年間お世話になりました。私が入職した翌年に大学院博士後期課程が開設されるということもあり、博士課程開設の式典、高井コーナー開設の式典、それに杉浦地域医療研究センター開設の式典などが続々と開催されておりました。また当時、鞠小路通を挟んで東側では積貞棟の建築が着々と進行しており、式典と建築工事が絶えないことに戸惑い驚いたことを記憶しております。また、兵庫県生まれの私としては、歴史的情緒豊かな街並みと、鴨川や嵐山といった自然に囲まれた京都での生活は正に高揚感溢れるものでした。周囲の教職員の方々にはご迷惑ばかりおかけしましたが、このような環境で、教育・研究に従事できたことは私にとって掛替えのない素敵な財産となりました。いろいろとご指導頂き本当にありがとうございました。

4 月からは筑波大学大学院人間総合科学研究科でお世話になっております。“筑波”大学ではありますが、私の職場は“東京キャンパス文京校舎”といいまして、東京都文京区にございます。社会人大学院として設立されており、授業は夜間および土曜日に開催され、平日仕事をしている社会人が通学して来ます。入職して 2 ヶ月が経とうとしておりますが、昼と夜の違い、医学研究科と人間総合科学研究科の違い、関西と関東の文化の違いなど慣れないことばかりで、様々な教職員の方にご指導いただきながら、迷走する日々を過ごしております。京都大学を退職する際には、「京都大学で経験したこと、学んだことを活かして、新天地で精進します・・・」と背伸びしたご挨拶をさせて頂いたのですが、当分の間はむしろ腰を落として地固めで時が過ぎてしまいそうです。ゆっくりゆっくりではありますが、少しずつ腰を伸ばしながら教育・研究に精進したいと考えております。今後ともご指導ご鞭撻を賜りますようお願い申し上げます。

最後になりましたが、京都大学の皆様の益々のご活躍とご繁栄を祈念しております。



## 退職のご挨拶

孔 相権

平成 25 年 3 月末日をもちまして京都大学大学院医学研究科人間健康科学専攻安寧の都市ユニットを退職いたしました。京都大学には教員として約 4 年、学生として 13 年もお世話になりました。出身は滋賀県大津市の天津京近辺ですから、比叡山を境に京都と滋賀、非常に狭い範囲で人生のほとんどを過ごしていたのだなと実感しているところです。学生時代も含めた私にとっての京都大学とは、なんともいい加減でぬくぬくとした居心地の良い場所でありながら、好きなことを探究するための自由は限りなく認められるという、非常に懐の深い摩訶不思議な場であったと感じています。そうしたある種のんびりしながら自由に思索に耽ることができる環境は、昨今の効率主義的考えの下、アカデミズムの場からすさまじい勢いで排除されつつありますが、未だそれが行える懐の深さが京都大学の偉大さであり、私が愛して止まない理由なのではないかと考えております。京都大学教員として過ごした年月については、医工連携ユニットとして設立された安寧の都市ユニットに工学出身でありながら医学系教員として配属され、ユニットが提供する教育カリキュラムを履修する社会人履修生と医学・工学系大学院生と互学互習を行いながら、「安寧の都市」という非常に難解なキーワードについて思索を深められたのではないかと考えています。妙ちくりんな考えをし、放浪癖のある私が皆様に多大なご迷惑をおかけしながらも職務をなんとか全うできたのも、人間健康科学専攻の諸先生、安寧の都市ユニットの諸先生、事務職員の皆様の多大なご支援のおかげです。本当にありがとうございました。

新天地である山口大学では再び工学部に所属することになり、本来の専門である医療施設、高齢者施設計画について



で教鞭をとることとなりました。生活拠点から比叡山というランドマークが消え、微妙にどこか居心地の悪さを感じながらも新生活に慣れつつありますが、京都大学で深めた思索を更に深める時間というのがなかなか取れないのが現状です。隙を見つけてはサボリ癖を発揮し、思索を深める時間を持ちたいと考えております。今後も京都大学に在籍していた時と同様に「ミンナニデクノボートヨバレ　ホメラレモセズ　クニモサレズ　サウイフ教員ニ　ワタシハナリタイ」を人生のテーマに細々と好きなことを探究していきたいと考えております。

末尾になりましたが、京都大学の皆さまの益々のご活躍とご発展を心より祈念し、退職のご挨拶とさせていただきます。



## 新任のご挨拶

看護科学コース 教授 田村 恵子

2014年1月1日付けで、京都大学大学院医学研究科人間健康科学系専攻 臨床看護学講座緩和ケア・老年看護学分野の教授に着任いたしましたので、皆様にご挨拶申し上げます。

私は、四天王寺女子短期大学卒業後、一般病院の消化器内科病棟で看護師としての歩みを始めました。その当時、消化器内科病棟には胃がん、肝臓がんなどのがん患者さんが数多く入院されていましたが、患者さんの大部分は真実の病名は伝えられないままに、痛みにもがきながら、最後の時を過ごされていました。この経験から、がんの終末期医療に関心を持つようになり、ホスピスケアの草分けである淀川キリスト教病院に就職し、1989年からホスピスケアに従事する機会に恵まれました。ホスピスとの出会いから、患者さんの状態により適した看護を提供するには知識が必要であると感じ、聖路加看護大学大学院看護学研究科修士課程への進学を決意しました。在学中に公益社団法人日本看護協会に専門看護制度が制定され、1997年にがん看護専門看護師の資格を取得いたしました。その後も、淀川キリスト教病院でホスピスケアに主軸を置きながら、がん診断時から終末期まで、その方の病いの軌跡に寄り添うケアを実践してまいりました。こうしたケアの実践を、2008年6月にNHK「プロフェッショナル仕事の流儀」で、『希望は、必ず見つかる ～がん看護専門看護師・田村恵子～』として紹介いただきました。臨床でのケアを第一義として、看護を続けてきた私にとってはとてもうれしい体験でした。

研究に関しては、修士課程修了後も細々とですが、臨床での問いを同僚や大学院生と共に取り組んでまいりました。特に、進行がん患者のスピリチュアルケアについて研究を深めたいとの思いから、大阪大学大学院医学研究科の医の倫理学分野に進学し、哲学・倫理学についての学びを深めると共に、現象学を用いた質的研究に取り組みました。スピリチュアルケアに関しては、今後もライフワークとして取り組み続けたいと思っています。また、7～8年前からは、緩和ケアやエンド・オブ・ライフケアに従事する看護師への教育プログラムの開発に関わらせていただいております。たくさんの興味と疑問を通して、教育の重要性を再認識いたしました。

このたびご縁があり臨床看護学講座緩和ケア・老年看護学分野の教員として着任いたしました。教員は全くの初めての経験で戸惑うことばかりですが、先生方、事務職員の皆様方のご支援を頂き、楽しく勤務させていただいております。心から感謝申し上げます。まずは、私の強みである臨床で患者さんやご家族から教えていただいたことを、一つ一つ丁寧に学生に伝えることから始めたいと思っています。

今後ともご指導、ご支援賜りますよう、よろしくお願い申し上げます。



## 着任のご挨拶

看護科学コース 准教授 西垣 昌和

平成 26 年 3 月 1 日付で、看護科学コース基礎看護学講座准教授を拝命いたしました西垣昌和（にしがきまさかず）と申します。留学先から帰国して 3 日後には東京から京都に移動し、なかなか京都の醍醐味を堪能する機会もないままに、はや 3 か月が経過してしまいました。今は専ら学生からお勧めポイントを聞いてはその情報だけが蓄積されています。

さて、私は、2000 年に東京大学医学部健康科学・看護学科を卒業し、東京大学医学部附属病院にて、整形外科、HCU/救急部と、いわゆる超急性期～急性期の看護を経験いたしました。その後、修士課程、博士課程共に東京大学大学院医学系研究科健康科学・看護学専攻にて学びました。大学院在学時に、学部生時代のわずかながらの分子生物学領域での経験を指導教員に着目していただき、遺伝医療の世界へ足を踏み入れることとなりました。修士課程在学中に癌研究会附属病院家族性腫瘍センターにて家族性腫瘍の遺伝カウンセリングについて学んだことを皮切りに、以後は生活習慣病を含む成人発症型の遺伝性疾患・多因子疾患を題材として、遺伝医療において看護職が果たすべき役割のモデルを構築するための研究を継続しています。その過程で、2008 年には 2 型糖尿病患者の血縁者を対象とした発症予防プログラム作成をテーマとして学位を取得しました。また、博士課程在学時より遺伝カウンセリングに従事しており、2010 年には日本人類遺伝学会、日本遺伝カウンセリング学会より認定遺伝カウンセラーとしての認定を受けました。

これまで看護学の教員としての自身を鍛えるうえで常に心がけてきたのは、研究・教育・臨床の 3 本柱をバランスよく固めることです。これまでは幸いにも上司や同僚、そして学生に助けられ、研究の生産性を保ちながら、教育面での貢献に対し賞をいただいたり、遺伝カウンセラーとして認定されたりと、この 3 本柱を固めてこれました。これからも、研究者として質の高いプロダクトを公表し続け、教育者として学生のロールモデルとなり、そして臨床において医療人としての感性を磨きつづけるとともに、患者に研究成果を直接還元し続けることに、努力を惜しまずに精進していく所存です。

特に教育については、未来の同志、共同研究者、そしてよきライバルを養成できるよう、より一層力を傾注していきたいと考えております。先に書きましたように、私は本学に着任する直前は、米国ノースカロライナ大学（UNC）看護学部に客員研究員として在籍しておりました。UNC は、アメリカの看護学部のなかで、UCSF、ペンシルベニア大学、ジョンズホプキンス大学に次ぐ 4 位にランキングされる活力ある大学です。留学中、幸運なことに学部・大学院のクラスで一教員として講義・ディスカッションをする機会を持たせてもらうことができました。その中で、将来のビジョンについて語りあうことがあったのですが、学生たちは皆、自分のビジョンについてなんとも自信に満ちた表情で語っていました。発展途上の学生たちですので、多少ピントがずれているものもあるのですが、それもまた面白く、そしてなにより鮮明なビジョンを語るができる学生たちが集っていることに心強さを感じたことを鮮明に覚えています。本学に着任して 3 か月、面談や、講義・演習を通して、徐々に学生たちのキャラクターもつかめてきたところです。もちろんアメリカ人と日本人の国民性の違いはあるのですが、どちらかと言えば、迷いを学生から感じるもののほうが多く、迷うのは若者の特権とはいえ気がかりです。学生が将来への希望、看護学の展望についてお互いに語り合い切磋琢磨できるような、バイタリティあふれる学生生活を送れるよう尽力して参りたいと思います。よろしくご指導いただきますようお願い申し上げます。



## 就任のご挨拶

看護科学コース 准教授 古田真里枝

4月1日付で、人間健康科学系専攻看護科学コース家族看護学講座女性生涯看護学分野の准教授に就任致しましたので、この誌面をお借りして皆様にご挨拶申し上げます。就任して2ヶ月、英国と日本との環境の変化や、京都での新たな教員生活で、適応に精一杯の日々ですが、専攻内の先生方や事務の方々からの多くのサポートを受けながら、そして学生からの刺激を受けながら、充実した毎日を送っております。

私は、幼少時代からアフリカに興味があり、アフリカで保健医療活動に携わりたいとの思いから助産師になりました。1999年に渡英し、ロンドン大学東洋アフリカ研究学院で国際開発・比較文化を学び、またロンドン大学公衆衛生熱帯医学大学院修士課程でリプロダクティブヘルスを学びました。その後、国連人口基金スーダン事務所で働く機会を得、停戦地域における国内避難民や、エチオピア・エリトリア難民を対象としたリプロダクティブヘルスプロジェクトの立案、ニーズ調査を担当致しました。立案したプロジェクトは日本政府や他国政府からの多額な資金援助を受け実施されましたが、それらの多くはエビデンスが欠如している状態で実施されていることに倫理的ジレンマを感じました。保健プログラムの効果・効用をエビデンスとして確立できる人材が深刻に不足している状況を目の当たりにし、この経験が、私が将来研究者になりたいと願うきっかけとなりました。

2004年にスーダンより帰国し、聖マリア学院大学にて国際看護学の講師として教育に携わる機会を得ました。その間、文部科学省からの助成を受け、再びロンドン大学で6ヶ月間の研修を受けましたが、研究手法をさらに学ぶ必要性を痛感し、2008年、ロンドン大学キングスカレッジロンドンの博士課程に入学しました。在学中は指導教授の勧めで聖トーマス病院のウィメンズヘルスリサーチグループの一員となり、これを機に英国の母子保健の研究に携わるようになりました。博士号取得後は、同大学院に疫学専門のリサーチフェローとして勤務し様々な研究に携わりました。

これまでの仕事を振り返れば、助産師、アフリカでの保健政策プログラム立案、そして英国の研究者と、一見一貫性に乏しいキャリアではありますが、母子保健に様々な立場から携わる中で多くの学びを得ることができました。今後は、これまでの学びを生かし人材育成に取り組むと共に、国際的な共同研究の発展にも力を注いで行きたいと思えます。京都大学という日本、そして世界をリードする組織の一員として働く機会を頂いたことに感謝しながら、微力ではありますが大学の発展に貢献出来るよう精一杯精進して参りますので、どうぞご指導、ご鞭撻の程よろしくお願ひ申し上げます。



## 新任のご挨拶

検査技術科学コース 准教授 上久保靖彦

平成 25 年 12 月 1 日付にて着任させていただきました。誠に有難うございます。

私は平成 8 年兵庫医科大学を卒業し、京都大学第一内科（現血液・腫瘍内科：大熊稔教授）で血液内科医としてのキャリアをスタートいたしました。手術ではなく内科的治療で診断から治療（造血幹細胞移植、免疫治療など）まで完結することができる領域ということで選択いたしました。実際のところはクリーンルームなどがある病棟で働く血液・腫瘍内科医の清潔感、高潔な印象に憧れがありました。兵庫県立尼崎病院血液内科（内田三千彦部長、田辺哲医長）にて血液腫瘍のいろはを学んだあと、京都大学血液・腫瘍内科（内山卓教授）の大学院に入学し、堀利行講師（現立命館大学生命科学研究科教授）のご指導の元、新規の細胞周期チェックポイント遺伝子 kpm の研究に従事いたしました。堀講師はとても純粋で真摯な研究者であり、研究者に必要な『運』『鈍』『根』を君は持っているといつも励まされたことは、現在の自分の根底の自信となっています。その当時、分子標的薬（チロシンキナーゼ阻害剤）が臨床応用されはじめたことは衝撃的な出来事でした。移植医療を受けなくても治療する可能性をもたらす薬剤が登場したことに心底興奮を覚えた私は、どんな苦難の道であっても最高の抗癌剤を作るという大望をいただきました。NIH（米国立衛生研究所）ヒトゲノム研究所の研究者として 5 年間の留学生活では、現 NIH 所長フランシス・コリンズ博士（ヒトゲノムプロジェクト統括責任者）とポール・リウ博士（現ヒトゲノム研究所副所長）のご指導の元、創薬ターゲットを見つけるため、CBF 白血病（最も多い白血病）のノックインマウス 6 種類を樹立することができました。そこから新しい白血病発症機構（RUNX1 Dominant Inhibition Independent leukemogenesis）を提唱し、新規の抗癌剤創薬に従事できたことは幸運そのものです。東京大学疾患生命工学センター放射線分子医学（宮川清教授）の教官、東大病院無菌治療部（黒川峰夫教授）の教官及び、東京大学血液・腫瘍内科第 6 研究室室長に採用され再度大学の血液・腫瘍臨床医に戻りました。移植医療、抗体療法などを行ううちに、再度どうしても新規治療法の開発研究を送りたくなり、大阪大学大学院医学研究科遺伝子治療学（金田安史医学部長）の教官へ採用いただけました。阪大では Translational Research の重要性を再確認した上、血液腫瘍に限られない『腫瘍学』と『治療戦略開発』という底知れぬ大きな領域を意識するようになりました。全く医局人事ではない経歴を歩んでまいりましたが、東大、阪大、京大と全く知らない私をいつも温かくお受け入れていただいたこと、一貫して素晴らしい上司や同僚に恵まれたことは、私の財産となりました。このたび足立壯一先生、諸先生方のご高配により京都大学に帰学することができたことは無上の喜びです。グローバルな医療専門家の育成と研究者の育成を行える最良の場をお与えいただいたことに深く感謝しております。微力ではありますが、今度は私が恩返しをする番と心しております。様々な場所での経験を活かし必ず人間健康科学系専攻より日本発の創薬、医療人育成に邁進いたします所存です。皆様のご指導を何卒宜しくお願い申し上げます。



## 着任のご挨拶

安寧の都市ユニット 特定准教授 小山 真紀

平成 26 年 4 月 1 日付けで、京都大学大学院医学研究科人間健康科学系専攻（安寧の都市ユニット）特定准教授として着任いたしました小山真紀と申します。どうぞよろしくお願い申し上げます。

私は、山口大学工学部知能情報システム工学科卒業後、同大学の大学院理工学研究科博士前期課程を修了いたしました。山口大学では情報工学系の学科および専攻でありましたが、学部生の時に阪神・淡路大震災が発生し、直接被害を受けることはなかったものの、あまりに甚大な被害の状況や生活再建の困難さなどを目の当たりにする事になりました。この災害の経験から、死者低減のための対策の必要性を強く意識することになり、研究室は地震防災に関する研究室に所属する事となりました。博士前期課程修了後は日本電信電話株式会社に入社し、企業内ネットワークの構築業務等に従事しておりました。ここでは、先端の情報技術に触れる機会に恵まれ、そのことが以降の研究における情報技術の活用にもつながってきております。

その後、(財)地震予知総合研究振興会の東濃地震科学研究所に転職し、揺れ～建物などの被害～死傷者の発生に至るメカニズムに関する調査・研究と災害対策に関する研究を主に行ってまいりました。東濃地震科学研究所在職時には、市町村の災害対策に関する研究について東京工業大学から博士(工学)の学位を授与されました。この時期には、私生活でも結婚、妊娠、出産という大きなイベントがあり、災害時の死傷や生活再建の問題がより一層身につまされる問題として認識される事となり、行政だけでなく、コミュニティ、さらには家庭、個人における災害対策へと研究の対象が広がっていくこととなりました。防災・減災は一つの分野だけで完結する問題ではなく、人を中心に多くの分野が相互に関係し合っている問題であるため、研究を通じて理学系(自然現象)、工学系(物的被害)、医学系(人的被害)、社会科学系(社会・経済的被害)などの研究者の方、実務者の方といろいろ議論をさせて頂く機会を得、俯瞰的な視点を持つことを学びました。

2010 年 4 月 1 日からは、京都大学大学院工学研究科都市社会工学専攻(安寧の都市ユニット)に着任いたしました。このたびの着任では、工学系から医学系への移籍ではありますが、同じ安寧の都市ユニットの所属ということで、これまで引き続き、どうぞよろしくお願い申し上げます。

安寧の都市ユニットは、少子高齢社会の中、平常時には健康で過ごしやすく、災害時にも強靱なまち(ここで言う「まち」とは場所だけでなく人も含んだ概念となります。例えば地域コミュニティのしっかりしたまちは、平常時でも過ごしやすく、住民同士の見守りができますし、災害時でも自助・共助の機能がしっかりしています)を担う人材の育成を目指し、医学系(人間健康科学系)と工学系(都市工学系)の融合ユニットとして組織されました。ユニットの講義につきましては、人間健康科学系の教員の皆様にも多大なご協力を頂きましてありがとうございます。履修生も大変刺激を受けております。この場を借りてお礼申し上げます。安寧の都市ユニットでは、多様なバックグラウンドを持つスタッフとの出会いと関わり、実務者として問題意識を明確に持った社会人履修生と自由な視点を持つ大学院生との講義など大変刺激的な毎日が始まりました。安寧の都市ユニットの講義では、2012 年度にカリキュラムの改訂を行い、2 コマ続きの対話主体の講義などの取り組みも行っております。専門知識に基づいた教員の視点、実務経験に基づいた社会人履修生の視点、固定観念のない大学院生の視点それぞれからの発言には、毎回新しい発見があります。実践プロジェクトという社会人履修生主体のゼミ形式の科目では、社会人ならではの問題発見や取り組みなど、こちらも日々刺激を受けております。また、大学の世界展開力強化事業「強靱な国づくりを担う国際人育成のための中核拠点」の講義の一つとして、「Disaster and Health Risk Management for Liveable City」という講義を担当させて頂いており(分担)、ASEAN からの留学生と京大大学院生への講義、フィールド学習、グループワークなどのディスカッションを通じて、国を超えた考え方の違いや問題意識など、日々新しい発見があり、ユニットを通じてこのような機会をいただいた事に大変感謝しております。

工学研究科在籍中より、野本教授、坪山教授、精山教授、二木教授をはじめとした安寧の都市ユニットに関係され



ている学内教員の方をはじめとして、講義や関わりを通じて種々学ばせていただいておりますが、いくつかの共同研究の機会にも恵まれました。野本教授とは災害時の医療連携について、精山教授とは超小型モビリティの評価について、そして二木教授とはモーションキャプチャを用いた高齢者の機能評価に関する研究をさせて頂いております。このたびの転籍を受け、工学的な視点だけでなく、医学的な視点や方法論など、さらに主体的に学び、今後の教育・研究に活かしていきたいと考えております。今後ともどうぞよろしくお願い申し上げます。

## 就任のご挨拶

看護科学コース 助教 宮田 千春

平成 26 年 4 月 1 日付で、京都大学大学院医学研究科人間健康科学系専攻看護科学コース在宅医療看護学分野の助教として着任いたしました宮田千春と申します。よろしくお願いいたします。

私は、熊本大学を卒業後、急性期病院での臨床経験を経て防衛省に採用され看護師として九州、静岡、北海道の病院で救急から慢性期まで様々な臨床経験を積んで参りました。管理者の職位に就き、マネジメントへの知識不足を実感し熊本県立大学大学院アドミニストレーション研究科看護管理専攻修士課程を修了しました。その後、京都大学医学研究科人間健康科学系専攻の博士後期課程に進学しました。修士・博士課程を通しての研究テーマは、看護の視点からリーダーシップ理論をはじめとする管理諸理論や管理技法を検討し、看護管理の実際および課題を文献や実践データに基づき分析し、看護管理のあり方を総合的に探求することです。具体的には、看護管理者のあり方とスタッフの職務満足度やストレスとの関連、院内暴力への看護管理的介入、看護管理者教育の日米比較等を明らかにしてきました。看護職には保健・医療・福祉分野で国民の生活と健康を守る専門職としての役割があり、看護管理の在り方は看護のみならず医療全体の質や経営に影響を及ぼすため、看護管理者の能力が問われています。そのため、看護管理学は今日の高度な医療への対応、地域や在宅看護能力の向上、看護経営管理、患者の権利の尊重、施策化等、期待される役割の質の変化に対応していく必要があります。今後は、これまでの研究内容を継続し深めていくと同時に「病院・診療所・地域様々な医療の現場で看護管理者の果たすべき役割と必要な能力、そのために必要な教育や環境」をより明らかにしていきたいと考えています。

在宅看護の教育に関しましては、先ず核家族化により高齢者と接する機会が少ない学生に対し、老年看護、介護、在宅看護に対する関心を高めさせることが重要であると考えています。近年在院日数の短縮や「治し支える医療」の進展等により、医療ニーズの高い患者の医療・看護提供の場が多様化しています。とくに、今後の超高齢社会では自宅での療養生活を万全にサポートできる体制の充実が望まれ、看取りなど在宅看護の質の向上が期待されています。臨床の現場で、老々介護の現状や高齢者の退院調整、在宅看護への移行の困難さを日々感じてきました。高齢者の救急搬送件数も増加傾向にあり、そのほとんどが老々介護あるいは独居者です。患者の意向を実現するために、家族に対して必要であった介入や医療者間の連携を検討し、事例の積み重ねが看護師の家族への早期介入に繋がっています。核家族化が進み、日頃接することが少なかった家族が高齢者の意思を正しく把握し代弁しにくい現状もあります。このような状況に看護師は患者の意思をどのように尊重しサポートを行えばいいのか判断が難しく倫理的なジレンマを抱える場面も多くあります。さらに、高齢者が入院後せん妄で暴れるケースも多く、せん妄アセスメントツールの導入を行い、せん妄予防や適切な看護介入を模索してきました。これらの臨床での経験を学生に伝え、培った看護実践能力を生かし、また教員諸先輩方々からご助言を頂きながら教育を実施していきたいと考えます。

今後ともご指導ご鞭撻を賜りますようよろしくお願い申し上げます。

## 新任のご挨拶

看護科学コース 助教 西村亜希子

2014年4月1日付で、看護科学コース基礎看護学講座の助教に着任いたしましたので、この場をお借りしましてご挨拶申し上げます。

私は、2004年に神戸大学医学部保健学科看護学専攻を卒業後、神戸大学医学部附属病院の心臓血管外科病棟で看護師として5年間勤務いたしました。その間、重症な患者の全身管理を行いながら、患者やその家族、多くの専門職種とともに急性期を乗り越えていく経験をする一方で、生命の危機的状況を経験しながらも、退院後の自己管理が十分に行えずに同じ疾患で入院や手術を繰り返す患者と多く関わり、自己管理支援について興味を持つようになりました。その後、本学看護科学コース生活習慣病看護学分野に進学し、健康行動の評価や自己管理支援に関する研究に取り組み、2011年に修士課程、2014年に博士後期課程を修了いたしました。

大学院5年間では、学外活動として、日本糖尿病療養指導士、糖尿病カンパセーション・マップ ファシリテーターとして、診療所や地域密着型の医療機関などでも療養支援を行ってきました。また、1型糖尿病患者会の設立とサポートに携わる機会に恵まれました。このような経験は、様々な側面から患者に関わり、看護師の役割について考える貴重な機会となりました。また、京都大学医学部附属病院の医師や管理栄養士、関連病院の看護師と療養支援に関する共同研究を行い、これらは現在も継続しております。特に、血糖自己測定（SMBG）を患者の自己管理に活用させるための研究では、測定方法やフィードバック方法、また、妊娠糖尿病のように他の糖尿病とは異なる特徴を持った集団への介入について検討してまいりました。SMBGは、日本語では血糖自己測定と呼ばれていますが、Self-Measurementでは改善しないことはすでに言われており、英語ではSelf-Monitoring of Blood Glucoseと表現されています。今後、これをSelf-Managementへと進化させるような活用方法を立案していきたいと考えております。

今年度より、現職に着任いたしまして、主に2回生を対象とした基礎看護学の授業に関わらせていただいております。教育に携わらせていただきますのは、これが初めてになります。着任以降、周囲の先生方より多くのご指導ご支援をいただき、日々勉強し、楽しみながら、取り組んでいくことができました。

社会の変化、医学・医療の進歩によって、健康に関する問題は多様化、複雑化し、健康と生活の質の保持、回復、増進を支援するために、看護師にはますます高い資質が求められています。そのため、基礎看護学の段階で、看護の基盤となる考え方、価値観、知識、技術を一つ一つしっかりと習得し、専門的な見方や考え方で対象を理解し、必要な看護を提供できる基本的な能力を身に付けることは、非常に重要であると考えております。教育者として、まだまだ未熟ではありますが、看護師としての土台作りができるように、一人一人の学生と丁寧に向き合っていきたいと考えております。また、これまでの臨床や研究の経験を生かし、看護の魅力や可能性を感じてもらえるように学生と関わっていきたいと思います。

今後ともご指導ご鞭撻を賜りますよう、よろしくお願い申し上げます。

## 就任の挨拶

リハビリテーション科学コース 助教 小川 真寛

平成 26 年 2 月 1 日付で、京都大学大学院医学研究科 人間健康科学系専攻の助教に着任いたしました小川真寛と申します。本紙をお借りして、着任のご挨拶をさせていただきます。

私は、広島大学医学部保健学科を卒業後、同大学大学院の修士課程へ進み、介護老人保健施設を中心に、通所リハビリテーション、通所介護等の施設等の複数の高齢者施設での作業療法士として勤務しました。その後、博士課程へ進学、オーストラリアのラ・トロープ大学への留学した後、回復期リハビリテーション病棟で作業療法の臨床・管理に携わり、その後京都大学に赴任することになりました。

この期間に、主に高齢者の転倒や病院・施設内での転倒に関わる研究に携わり、近年は高齢者・中途障害者の外出支援に関わるリハビリテーションや認知症をもつ方への作業療法に興味をもち、研究に取り組んでまいりました。まだまだ研究者としては駆け出しの身でありますので、周囲の先生方のご助言やお力添えを頂きながら、今後作業療法の臨床に活かせるような研究ができるように精進して参りたいと思います。

また臨床の現場では、今まで地域から施設、病院での作業療法、高齢者や身体障害者に対する作業療法に携わってきました。多くの患者様を通して作業療法やリハビリテーションについて学ぶ機会を得て、最初は手探りだった作業療法がやっと自分の形になってきたと思うようになりました。作業療法は一般的になかなか理解されにくい仕事で、自分も作業療法士になった頃は実際に良くわかっていなかったと思います。教鞭をとる立場になり、学生と一緒に学びながらではありますが、自分が経験したよりも、より学生が早く作業療法が分かるようになり、そしてその面白さに気づき、最終的に臨床家、研究者、次世代を担うリーダーとしてより良い作業療法士になってもらいたいと思っています。

教壇に立つようになりまだわずかですが、教育という業務に携わる中で知識、技術、現場での見聞を伝えることの難しさを感じております。さらに、慣れない大学の業務に苦戦することもあります。しかしながら、周囲の先生や職員の皆様方の助言やお力添えを頂けることで、何とか大学教員としてのスタートができていると感じております。まだまだ分からないことや至らないことがあり、皆様にご迷惑をかけることもあるかと思いますが、ご指導とご鞭撻を賜りますよう宜しくお願い致します。



## 第 26 回健康科学市民公開講座 開催報告

看護科学コース 細田 公則

平成 25 年 11 月 9 日土曜日午後、「がんへの取り組み」というテーマで第 26 回健康科学市民公開講座を開催しました。がんは死因の主要なものであり、その医療は重要であります。がん診断や治療・ケアなど、がんへの取り組みについての情報を得て頂く目的で、今回の講座を企画致しました。

当日は天気にも恵まれ、事前申込みの方を中心に 100 名以上の方にご参加いただきました。特に今年度、学生など若い世代の方にも多数ご参加いただきました。

坪山直生教授の開会挨拶に引き続き、4 部制で講演を行いました。

第 1 講では生活習慣病、特に肥満の専門家である細田より「肥満はがんの危険因子の一つである」のテーマで、肥満は高血圧・糖尿病・脂質異常症・心血管疾患などを引き起こす主要な要因というだけでなく、最近はがんの要因になっていること、また、それら様々な疾患やがん予防のために肥満の改善が重要であることを説明させていただきました。

第 2 講では、小児がん専門家で当専攻・足立壯一教授から「小児がん患者の長期フォローアップについて」のテーマで、50 年前まで不治の病とされてきた小児白血病に代表される小児がんは、治療成績の向上により約 80%もの長期生存が期待できる病気になったことで、長期経過観察（長期フォロー）が重要であるということ、また京大がんセンターとの連携他、当専攻作業療法学講座との貴重な研究内容やデータを交えての紹介がありました。

第 3 講では、最近京都大学医学部附属病院に設立されたがんセンターの松本繁巳准教授より「京大病院がんセンターの目指すところ」というテーマで講演していただきました。

第 4 講では、がん看護専門看護師で淀川キリスト教病院看護部の田村恵子主任課長（現 看護科学コース教授）から「緩和ケア—つらさを和らげてあなたらしく生きる」のテーマで、緩和ケアがどのように行われているかについて、淀川キリスト教病院での実際を紹介していただきました。

総合討論では、聴衆の方々から提出していただいた数多くの質問に対して、全演者の先生方で分担して答えて頂き、聴衆の理解を助ける総合討論になりました。

アンケートではテーマについて「大変良かった」24、「良かった」29、「ふつう」4、という集計結果でした。また個別のコメントとして、「がんについて正しい情報を得ることで不安がとり除けることを実感した」「がん治療について知ることができた」「希望の持てる話だった」など好意的なご意見も頂戴しました。ただ、会場の不便さや資料内容の薄さなどを訴える声が複数あり、今後の課題だと思います。



## 2013 年度オープンキャンパス

2013 年度オープンキャンパスは 2013 年 8 月 7 日（水）に前年度と同様、A 時間帯、B 時間帯の 2 回にわたって行われました（表 1）。全体説明会では、椎名学科長の挨拶のあと、各専攻（看護、検査、理学、作業）の紹介が各コース担当教員からされました。その後、各専攻に分かれて、実習等の体験、研究室との施設見学、学生個別相談が行われ、アンケート調査からも、いずれも好評でした。参加者は表 2 に示しますが、A 時間帯は女子 150 名、男子 25 名の計 175 名、B 時間帯は女子 95 名、男子 33 名の計 128 名が参加しました。専攻別では看護 146 名、検査 76 名、理学 63 名、作業 18 名でした。また、都道府県別では京都 34 名、大阪 34 名を始めとして東北や九州からも参加者がいました。2014 年度は 8 月 8 日（金）に同様のスケジュールで行われる予定で、今後の京都大学人間健康に多くのやる気のある学生のリクルートのために、重要なイベントであると思われます。

表 1 オープンキャンパス 2013 スケジュール

A 時間帯（12:30～14:30）		B 時間帯（15:00～17:00）	
12:00	全体説明会受付開始 ※全体説明会会場：第 9 講義室	14:30	全体説明会受付開始 ※全体説明会会場：第 9 講義室
12:30	開会 学科長あいさつ	15:00	開会 学科長あいさつ
12:35	各専攻の紹介 (看護・検査・理学・作業)	15:05	各専攻の紹介 (看護・検査・理学・作業)
13:00	各専攻説明会 ○看護学専攻（第 5 講義室） ○検査技術科学専攻（第 8 講義室） ○理学療法学専攻（第 7 講義室） ○作業療法学専攻（第 6 講義室） ★実習等の体験 研究室等の施設見学 学生個別相談など	15:30	各専攻説明会 ○看護学専攻（第 5 講義室） ○検査技術科学専攻（第 8 講義室） ○理学療法学専攻（第 7 講義室） ○作業療法学専攻（第 6 講義室） ★実習等の体験 研究室等の施設見学 学生個別相談など
14:30	終了	17:00	終了

表 2 オープンキャンパス 2013 参加者状況

## ●参加者数

	参加者数		高 1		高 2		高 3		既卒・その他	
	女子	男子	女子	男子	女子	男子	女子	男子	女子	男子
A 時間帯	150	25	58	13	57	8	25	1	10	3
B 時間帯	95	33	33	14	45	13	13	3	4	3
計	245	58	91	27	102	21	38	4	15	5
	303		118		123		42		20	

※既卒・その他（A 時間帯）＝既卒女子 5・男子 1、中学生女子 3、不明女子 3・男子 1

※既卒・その他（B 時間帯）＝既卒女子 3・男子 2、中学生女子 1、不明男子 1

## ●専攻別

	看護		検査		理学		作業		未定	
	女子	男子	女子	男子	女子	男子	女子	男子	女子	男子
A 時間帯	91	2	29	10	24	9	6	4	0	0
計	93		39		33		10		0	
	看護		検査		理学		作業		未定	
	女子	男子	女子	男子	女子	男子	女子	男子	女子	男子
B 時間帯	50	3	23	14	17	13	5	3	0	0
計	53		37		30		8		0	

## ●参加者の都道府県別人数【※A・B時間帯合わせた人数】

北海道	0	青森	0	秋田	0	岩手	0	宮城	2	山形	0
福島	1	茨城	2	千葉	5	栃木	1	群馬	1	埼玉	2
東京	9	神奈川	2	山梨	2	新潟	2	長野	2	静岡	10
愛知	11	岐阜	7	三重	37	富山	3	石川	3	福井	1
滋賀	15	京都	34	大阪	34	兵庫	37	奈良	12	和歌山	2
徳島	12	香川	2	愛媛	3	高知	4	岡山	2	広島	16
鳥取	3	島根	1	山口	4	福岡	2	大分	6	佐賀	0
長崎	4	熊本	2	宮崎	0	鹿児島	5	沖縄	0		

# 人間健康科学系専攻から博士が 12 名誕生しました

## 博士授与者と論文題目

井 口 順 太

論文題目：The effect of sex and fatigue on lower limb kinematics, kinetics and muscle activity during unanticipated side-step cutting.

(予測できない状況下におけるサイドステップ中の下肢運動学、動力学、及び筋活動への性差と疲労の影響)

福 元 喜 啓

論文題目：Effects of high-velocity resistance training on muscle function, muscle properties, and physical performance in individuals with hip osteoarthritis

(高速度筋力トレーニングが変形性股関節症患者の筋機能、筋特性および運動能力に及ぼす効果)

前 迫 真 人

論文題目：Exercise is more effective than diet control in preventing high fat diet-induced  $\beta$ -amyloid deposition and memory deficit in amyloid precursor protein transgenic mice

(APP トランスジェニックマウスにおいて、運動は食事改善よりも高脂肪食による A $\beta$  の沈着および学習記憶の悪化を改善する)

宮 田 千 春

論文題目：Characteristics and perception gap between staff nurse and nurse manager of the nurse manager's recognition behavior in Japan

(我が国の看護師長の承認行為の特徴と承認行為に対する看護師長とスタッフの認識のギャップ)

中 川 直 樹

論文題目：Human natural killer-1 sulfotransferase (HNK-1ST) -induced sulfate transfer regulates laminin-binding glycans on  $\alpha$ -dystroglycan

(HNK-1ST は硫酸基の転移によって  $\alpha$ -ジストログリカン上のラミニン結合性糖鎖の発現を制御する)

坂 東 美 佳

論文題目：Studies on pathophysiological significance of intraslet ghrelin using transgenic animal model.

(遺伝子改変動物を用いた豚島由来グレリンの病態生理学的意義の検討)

森 瀬 讓 二

論文題目：Structural and biochemical characterization of O-mannose-linked HNK-1 glycan expressed on phosphacan in developing mouse brains

(神経回路形成期におけるホスファカンには特徴的な O-マンノース型 HNK-1 糖鎖が発現する)

沖 田 祐 介

論文題目：Compensation by nonoperated joints in the lower limbs during walking after endoprosthetic knee replacement following bone tumor resection

(腫瘍用人工膝関節置換術後患者の歩行時の手術膝以外の下肢関節による代償戦略)

中 村 雅 俊

論文題目：Effects of a 4-week static stretch training program on passive stiffness of human gastrocnemius muscle-tendon unit in vivo

(4 週間のスタティックストレッチング介入が生体における腓腹筋筋腱複合体の柔軟性に及ぼす影響)



Priscila Yukari Sewo Sampaio

論文題目：Validation and translation of the kihon Checklist (frailty index) into brazilian portuguese  
(基本チェックリスト・ポルトガル語訳版の作成とブラジル人高齢者におけるその検証)

原 田 小 夜

論文題目：Corresponding difficulty for the elderly with mental cognitive impairments and effect of educational programs for caregivers

(精神認知機能に問題のある高齢者への対応困難な問題と対処教育プログラムの効果)

趙 朔

論文題目：Can gaze-cueing be helpful for detecting sound in autism spectrum disorder?

(自閉症スペクトラムにおいて視線手掛かりは聴覚的注意を促進するだろうか?)



## 博士号を取得して

井口 順太

平成 26 年 11 月に人間健康科学系博士課程後期を修了した井口順太と申します。通常の修了期間より約半年余り遅れましたが、何とかここまでたどり着くことが出来ました。この場を借りてお世話になった担当教官の市橋先生、並びに建内先生、スタッフの方にお礼を申し上げます。私は 2005 年に米国で修士課程を修了し、アスレチックトレーナーとして国内の大学で主に体育会アスリートのリコンディショニングなどを担当しておりました。修士課程を終えた後、5 年間は現場経験をみっちり行い、その後博士課程に進むか決めようと考えておりました。そして、折しもちょうど 5 年後の 2010 年に本学の博士課程後期に進学することになりました。当初は京大で他の専攻に出願する予定だったのですが、その年は学生募集をしないという旨を告げられ、どうしようかと悩んでいたところ知り合いの方に人間健康科学系のことを教えていただきました。修士課程時代のインターン先が理学療法士が経営するクリニックで、非常に勉強になったことがあり、今回も同様のことを期待して入学することを決意しました。

博士課程に進学する前も現場のデータを収集して、主にスポーツ傷害に関する研究を行っていたのですが、博士課程では以前から挑戦してみたかった非接触型膝前十字靭帯 (ACL) 損傷メカニズムの解明に取り組みました。このテーマは過去 30 年間多くの研究者が発生メカニズムの解明に取り組んできたものの、未だにはっきりと原因が突き止められていないものでした。研究計画書の作成、パイロット実験、参考文献の収集など莫大な時間がかかりましたが、自分でテーマを探し、実験方法をデザインするというところに新鮮味を感じながら非常に良い経験をさせていただきました。ただ既に結婚をして、さらに子供がいた状況だったので嘱託講師などのパートタイムと並行して行ったデータ解析、論文作成は本当に大変でした。学位論文は卒業時期の 3 月までに受理されず、2 か月後の 5 月ようやく受理されました。11 月に学位記をいただいた時は本当に嬉しくて、家族全員で喜びを分かち合うことが出来ました。現在は体育系学部の大学教員を目指し、就職活動を行っております。希望通り教員になった暁には、本学で学んだことを活かし、世の中に役立つような研究、後進の育成を行っていきたいと考えております。

## 博士号を取得して

福元 喜啓

平成 26 年 1 月に博士号を取得いたしました。

私は京都大学医療技術短期大学部を卒業後、京都市内の病院で 6 年間勤務し、本学修士課程の 1 期生として入学しました。修士課程を修了後、博士後期課程へと進学し、研究指導認定退学と就職を経て、このたび博士号を取得する運びとなりました。

修士課程に入学した当時は校舎の改築が始まろうとするときであり、まだ医療短大の頃の趣が残る学舎でした。6 年間の臨床期間を経てから大学院に入学した私にとって、この学舎でもう一度学問に向き合えることには感慨深いものがありました。工が進むにつれ使える教室も少なくなり、院生室も点々と引っ越しをしましたが、限られた空間で授業を受けたりゼミや実験を行ったりしたのも良い思い出です。現在の建物にリニューアルし本格的な環境が整ったのは修士 2 回生になった時でした。

臨床では管理業務や後輩の指導も行ってたので、年下の院生と同じ立場で研究やゼミを行うことは、とても新鮮でした。また、異分野の方との交流を深めることができ、国内だけでなく国際学会での発表の機会も得られるなど、大学院の 5 年間は自分が研究者として視野を広げ成長する上での貴重な毎日でした。先生方や院生とのお酒の席で、遅くまで理学療法や研究（や他愛ないこと）について語り合ったことも、私の大切な財産です。

平成 24 年 3 月に博士後期課程を研究指導認定退学した後より、神戸学院大学の助教として勤務し、理学療法士の養成教育に携わっております。大学からは明石海峡大橋を望み、周辺にはところどころに田園風景も残り、自然を身近に感じることができます。また明石市にも近く、新鮮な海の幸も堪能できます。このような素晴らしい環境のもと、日々の研究・教育に勤しんでいます。また、理学療法の基本は臨床からと考え、今でも非常勤で臨床勤務を行っています。少しばかりの時間ですが、患者さんに直接触れ、患者さんの声を聴くのは貴重な時間です。

京都大学で学んだことを活かし、「人間健康」「理学療法」の科学的発展に寄与できるよう、これからも邁進していきたいと思っております。最後になりましたが、指導教授の市橋則明先生、理学療法学講座の先生方・院生のみなさん、研究に参加協力いただいた方々に感謝いたします。

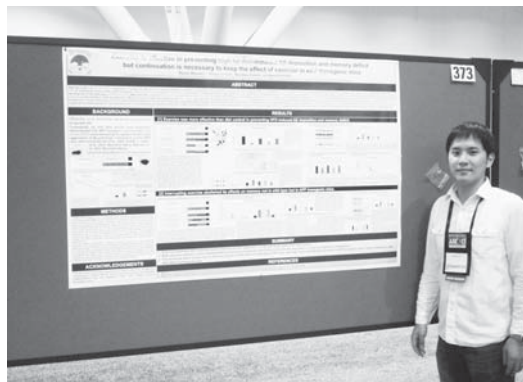


## 博士号を取得して

前迫 真人

京都大学医学部保健学科（現、人間健康科学科）へ二期生として入学し、博士学位取得まで九年と長い道のりではありましたが、思い返せば、実り豊かな研究生活を歩む事ができました。まず、支えてくれた家族、友人、そして、指導教員の木下彩栄教授と研究室の仲間の皆さんに感謝の気持ちをお伝えしたいと思います。

私が研究者を志すにあたり、京都大学の存在は大きいものでした。自由な学風と豊かな研究環境のもと、実働しているハイレベルな研究を肌で感じ取り、研究者を強く志すようになりました。一方で、私は、新しい学問である「人間健康科学」が社会に果たす役割にも真摯に向き合い、「疾患の発症機序を解明し、予防法を確立する」事で、その役割の一助を担いたいと考えてきました。私はアルツハイマー病の予防に関する研究を行って



来ましたが、近年、危険因子として注目を集めている糖尿病や肥満がどのようなメカニズムでアルツハイマー病発症の引き金となるのか、また、どのように発症を食い止める事ができるのか、モデル動物を用いた分子生物学的なアプローチで検討して来ましたが、今後は、京都大学で得た英知を武器に、世界で活躍していきたいと思っています。

これから同じ道を歩まれる皆さん、京都大学の豊かな環境を大いに活用して下さい。自由な学風のもと、解明したい疑問を自ら持ち、多めにチャレンジして下さい。修了生として、医学研究科人間健康科学系専攻のますますの発展をお祈りしております。

## 博士号を取得して

宮田 千春

私は、臨床で看護師として勤務を続けながら、他大学院の修士課程を修了し、博士課程に進学しました。博士課程在学中の3年間は臨床と思うように進まない研究との両立で苦しいこともありましたが、院生室にいる間は学生として研究に専念できることが楽しく、大変充実した時間でした。

博士論文は、看護管理者である看護師長の承認行為と看護スタッフのストレス対処能力との関連に着目し、スタッフの望む看護師長のあり方の特徴から看護管理者に求められる資質を明らかにしました。修士・博士課程を通じた研究活動において看護師長のマネジメントへの知識やスキルが及ぼす看護スタッフのモチベーションや就業継続への影響の大きさを再認識させられ、看護管理のあり方への探求は今後も継続したテーマと考えております。また、荒井ゼミでは看護師のみならず理学療法士や作業療法士、栄養士、薬剤師とさまざまな専門職の方々からのご助言を頂き、多く研究仲間を横断的に作る機会に恵まれました。そこでの意見交換は大変有意義なものであり、今研究を行う上で大きな力となっています。現在、私は博士課程修了を機に20年以上過ごした臨床を離れ、京都大学医学系研究科地域看護学在宅看護の助教として勤務しており、アカデミックの世界へと進みました。まだ着任して数カ月ですが、ここでの教員の方々との出会いや学生との交流もまた意味深いものと感じており、皆様からご助言を頂きながら教員として成長していきたいと考えております。さらに、今後は修士・博士課程を通して、研究の道を志した時の気持ちを忘れず、「どう臨床に活かすのか・・・」といつも臨床的視点を持ちながら研究に取り組むことに精進していきたいと思っています。

最後になりましたが、博士課程にてご指導をいただきました荒井秀典教授をはじめ、これまでの研究でご支援をいただきました多くの皆様に厚く感謝申し上げます。



2014年3月学位授与式を終えて  
(指導教授とともに)

## 博士号を取得して

中川 直樹

私は平成 17 年に、京都大学医学部保健学科（現：人間健康科学科）検査技術科学コースに入学しました。その後、9 年間もの長い大学生活をようやく終え、この春から博士研究員として、本格的に研究の道を歩み始めています。臨床検査技師として病院で働くことを目指して入学したはずでしたが、基礎研究の世界に飛び込むことになり、自分でも大変驚いています。

大学生活を振り返ると、3 つの大きな分岐点がありました。それは、修士課程への進学、博士後期課程への進学、そして研究の道を選んだことです。もともと理科の実験が好きだった私は、4 回生の卒業研究で最先端の実験技術に興味を引かれ、すぐに修士課程への進学を決めました。最も悩んだのが 2 番目の分岐点でした。つまり、修士課程を修了して就職するか、博士後期課程へ進学するか、という選択です。修士課程に進学した当初は企業への就職を考えていましたし、一緒に大学院に進んだ友人の多くは修士号を取って就職していきました。しかしこの頃には、実験の楽しさに加えて、「問題点を探し、仮説を立て、それを実験で証明する」という研究のプロセスに魅力を感じ始めており、この気持ちが大きな後押しとなって博士後期課程への進学を決意しました。博士後期課程の 3 年間では、国内外での学会発表や、他大学との共同研究など、充実した研究生活を送ることができました。これらの経験が、生物学の研究を一生の仕事にしたいという気持ちを私に強く抱かせ、アカデミックな研究者の世界へと自然に興味に向いていったのだと思います。

このような経緯で研究の道を志すに至り、また「人間健康科学」の博士号取得によってそのスタートラインには立つことができた私ですが、ここから先は、単に実験が好きという気持ちだけでは乗り越えていけないことはわかっています。それでも、初心を忘れずに努力し続ければ、人間健康科学科の卒業生であることを誇れるような研究者になれると信じています。私は大学院生活を通して、人生の目標を立てるきっかけとなる素晴らしい経験ができました。そのような機会があることを後輩のみなさんにも知ってほしいですし、人間健康科学の博士号を取って活躍する人が増えればいいなと思います。

最後になりましたが、未熟な私に主体的に実験ができる環境を与えて下さいました指導教官の岡昌吾先生に、この場を借りて深く感謝申し上げます。

## 博士号を取得して

坂東 美佳

京都大学保健学科の第一期生として入学した当初、科学捜査や鑑識に興味を持ち、将来は警察関係の仕事に就くことを目指していました。そんな私が今、博士の学位を取得し、研究に従事していることは、非常に驚きでもあります。

研究に興味を抱くようになったのは、バセドウ病を発病したことが大きかったと思います。正直なところ、入院することも長期の通院を要したこともなかった私にとって、医療というのはどこか別世界の出来事のように、あまり興味の対象ではなく、自分が医療関係の仕事をするとは想像もしていませんでした。しかし、患者として病名が判明するまでの不安や、診断後、投薬によって治療できると判明した時の安心感、治療によって生活への支障がなくなっていくことを実感した、という経験を通し、医療行為が患者に与える影響、医療の進歩の重要性に気付いたことで、医学研究の役割、興味深さを感じるようになりました。

4 回生になり、卒業研究のゼミ希望の用紙が配布された際、担当医であった赤水先生の名前を見つけ、絶対ここに行く！と強く希望したことは、今でも鮮明に覚えています。赤水先生に担当して頂かなかったら、私の無理を許して下さいだった福田善弘先生の存在がなければ、今、こうして研究に従事することはなかったかも知れません。

卒業研究時には、先生のテーマのお手伝い、という要素の強い実験だったものが、修士になると自分だけの担当テーマが与えられ、自分だけのデータが出てくる、自分だけが知っている現象がある、ということが非常に楽しく、同時



にデータに対する責任も感じるようになりました。博士課程になると、テーマ自体も提案できるようになり、ますます研究に対する責任は増えましたが、自分の予想や仮説が証明できた時の喜びは、他には変え難いものがあります。この喜びを感じられるからこそ、全く思うように結果の出ない状況も耐えることができ、現在も研究に関わっているのだと思います。また、博士課程では修士までの専門分野と異なる分野のラボに所属したこともあり、毎日発見の連続で、充実した日々でした。

最後になりましたが、卒業研究から修士・博士課程でご指導頂きました赤水先生、現在もご指導頂いている岩倉先生、博士課程で指導教官を引き受け、別ラボでの実験も許可して下さい下さった足立先生、今まで関わって下さった方々に感謝申し上げます。まだまだ未熟で、日々学ぶことの多い現状ではありますが、研究に精進していきたいと思えます。

## 博士号と人生の分岐点

森瀬 譲二

今この文章を執筆するにあたって初めに思い出すのは、私が2005年に保健学科に入学試験を受けに来たその日。その時はまだ本学科は旧校舎でした。当時私が試験を受けた会場は現在の事務室の前辺りです。今ではその面影は無く、立派な新校舎になっていますが、当時の私は『これが大学の講堂か』と心踊るほどの大きな講堂に見えました。あるいは学部2回生時に生化学など多くの専門科目の授業を受けた教室（現在の高井ホール横あたり）。クラス三十数名と長く過ごした場所でもあります。今でもそれらの光景は目をつぶれば浮かびます。しかし浮かぶ旧校舎の光景は博士課程修了した現在でも、その場所にあるかのように思えるほど鮮明なものです。それくらい学部入学から博士号取得までの9年間の歳月は長いようで、ほんの一瞬の出来事のように感じます。

『博士号』というのは私にとって、博士後期課程3年間で取得できた単なる『肩書き』ではありません。保健学科に入学してからの様々な人との出会いと別れ、その出会いを育んでくれたこの9年間の環境、それら全てが詰まった自身の『記録』であり、一つでも欠ければ今の私はありません。もし私が本学科に入学していなければ、アカデミックの道に進むことは無かったでしょう。書き切れない程の人生の分岐点がありましたが、その大きな岐路の一つとなったのが、学部4回生の研究室配属で岡先生及びその研究室メンバーと出会ったことです。

元々臨床検査技師というお仕事に興味はあったものの、基礎研究の道にも強い興味がありました。しかし研究室配属前では、どんな研究室がよいのか、どんな研究がしたいのか、全く検討もついでませんでした。とりあえず当時人気が高かった（今でも人気はあります）岡先生の部屋で自分のやりたいことを探してみよう、そんな安易な思いで研究の道に進みました。ところが初めは数々の英語の論文を目にして、『こんな研究・発想は自分には無理だ』と思ったほど、研究の世界の厳しさと難しさを痛感しました。ただそんな中でも、何も分かっていない私に、根気強く岡先生や研究室の先輩方が丁寧に教えて頂きました。この『博士号』の取得は、多くの人々に支えられた結果でもあり、その助力がなければ今の私は無かったことでしょう。

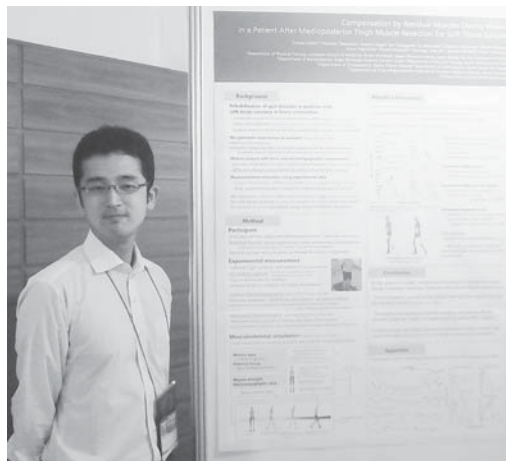
現在私は岡先生の研究室で研究員を行っており、新しく配属してきた学生たちに指導もしています。自分が辿ってきた分岐点を彼ら彼女らも通るかもしれません。私の経験を活かし、そんな学生たちを支えながら、一人でも多く研究の楽しさを知ってもらえるよう貢献していきたいと思えます。

## 大学院の5年間を振り返って

沖田 祐介

私は大学院で脚の骨や軟部組織に発生するがんを治療された患者さんの移動動作の特性を研究しており、後半の博士後期課程ではコンピュータシミュレーションを用いた歩行解析という、これまでに比べて応用的な解析手法に取り組みました。研究室でも初めての内容である上に工学的な色彩も強く、計画当初は学内外問わず関係する講義や勉強会などに出て行っただけでは情報を集めてばかりで手ごたえの少ない日が続いていたことを覚えています。しかし指導教員の坪山教授を初めとした周囲の方々の助けもあり、地道な学習を継続することで研究のイメージは次第に固まり、少しずつ研究を進めていけるようになりました。特に患者さんを想定したモデルがコンピュータ上で初めて歩いた時の達成感は大きく、こうして日々の積み重ねを元に課題を1つ1つクリアしながら、研究活動を通じて新しい知見を得るという経験をしてしまうと、何も知らなかった昔にはもう戻れません。そうこう悩みながら進めてきた研究も少しずつ形となり、博士後期課程中には数度国際学会での発表の機会に恵まれました。自身の発表を通じともよい経験をさせて頂くとともに、多くの研究者との出会いには大いに刺激を受けました。大学病院では臨床活動に参加させて頂き、理学療法士として貴重な経験を得ると共に、自分の研究活動に対しても重要な示唆を得ることが出来ました。

2014年3月に博士後期課程を修了した後、この4月から私は本学の研究員として研究活動を行う一方で理学療法士としての臨床活動も継続しており、充実した生活を送っております。私が理学療法士になる当初はいわゆる「凄腕の臨床家」となることが目標だったのですが、進路を決めてから約10年、まさか自分が研究者として身を立ようとしているとは夢にも考えておりませんでした。大学院生活は決して楽な道のりではありませんでしたが、5年間で京都を過ごし、得られたものは今後の人生の大きな糧となると確信しています。同じように大学院に進まれる方々にもぜひこの充実感を味わって頂きたいと願うとともに、その様な環境を提供して頂いた指導教員の坪山教授をはじめとした先生方や関係者の皆様に改めて感謝いたします。幸いにも博士号取得というスタート地点に立つことが出来ましたので、今後も研鑽を続け、医療や科学の発展に貢献できるよう尽力する所存です。



## 大学院生活5年間を振り返って

中村 雅俊

平成26年3月に人間健康科学系専攻博士後期課程を修了致しました、中村雅俊（なかむらまさとし）と申します。この度は、本紙面をお借り致しましてご挨拶申し上げます。

私は平成20年4月に修士課程に進学し、5年間、市橋則明先生のもと、研究活動に従事してまいりました。修士課程に進学した当初は漠然と研究をしたいと考えていた自分の甘さも有り、朝から晩まで研究室に籠りきりの日々で、今となって考えると楽しくも厳しい日々でした。その中でも自分の研究テーマとの出会いは自分の中では非常にセンセーショナルでした。私の研究テーマは「ストレッチングが筋の柔軟性に及ぼす影響」についてでしたが、今まで経験的にストレッチ



を行うと柔軟性が増加すると信じていた事が、いまだに科学的根拠がないことを知ったときは愕然とし、これをテーマにしたいと強く思いました。

研究を開始すると、様々な技術的な問題や知識の足りなさなどから研究が進まない日々もありましたが、徐々に新しい知見を得ていくことが面白く、「もっと深く研究をしたい」と思い、修士課程修了後は博士課程に進学を決めました。博士課程では初めて海外の学会に参加し、発表する機会を得たり、論文を発表する機会を得ることが出来ました。大学院生活で得た経験は今後の研究活動の礎になったと確信しており、まだまだ未熟者ではありますが、ようやく研究者としてのスタートラインに立つことが出来ました。市橋先生をはじめとする大学院の諸先生や院生の方々のご指導ご鞭撻により、無事に博士号を取得することが出来ました。この場をお借りしまして、厚く御礼申し上げます。

現在は、4月より同志社大学スポーツ健康科学部の助教として教育・研究活動に従事しております。今までは医療系大学の学生と接する機会が多かった中、医学的な知識を持ち合わせていないスポーツを専門に学ぶ学生さんに指導を行う難しさを感じながら、日々、勉強させていただいております。分野は少々違いますが、京都大学博士後期課程修了者の名に恥じぬように教育・研究活動を進めてまいりたいと思います。今後ともご指導ご鞭撻の程、どうぞよろしくお願い致します。

## Message from a PhD Graduate

Priscila Yukari Sewo Sampaio

I am Priscila Yukari, I graduated in March 2014 in the doctoral course in the Fusion Unit for Near Future Human Health Sciences, Kyoto University, under the supervision of Professor Dr Hidenori Arai.

I have achieved important professional goals during this time. I was involved in relevant researches and had improved my researcher's skills. The seminars in which I was involved were composed by a multidisciplinary health team including medical doctors, nurses, physiotherapists, occupational therapists, physical educators, pharmacists, among others. So, our seminars' discussions were very fruitful and I, as an Occupational Therapist, learned much more about the other professionals' contributions regarding the elderly care.

In addition, I had the opportunity to be engaged in several national and international congresses; meeting influential people in my research area. Such meetings encouraged me to improve my researches aiming to be a memorable researcher and health professional in the gerontology field.

Moreover, I felt very lucky because my supervisor is a great and open minded person. He understood all my difficulties as an international student and supported me every time I needed and encouraged me to always do my best.

In few words, I had a great time during my doctoral course in Kyoto University, knowledge and memories that I will carry for the rest of my life, so I must say "THANK YOU" to all the professors, colleagues and staffs who participated in my journey.

## 博士号を取得して

原田 小夜

私は、大学卒業後、行政保健師として勤務し、社会人入学で他大学の修士課程を修了した後、京都大学博士後期課程に進学しました。自分の子供と同じ世代の若い学生さん達と一緒に、3年間大学院で過ごさせていただきました。平成23年4月の入学当初は、精神保健福祉センターに勤務をしていましたことから、3月に発生した東日本大震災の被災地支援のため、初回のゼミから参加できませんでした。山根先生からは、「ゼミも大切けども、被災地支援の業務は君の研究にも重要」と言われたのを思い出します。この3年間は仕事と家事と研究の両立は本当に大変で、何度かくじけそうになりましたが、山根先生に助けていただいて、無事に修了することができ、本当に感謝しております。

山根先生には、研究テーマの設定、データ収集、分析、すべての研究過程で、いろいろとご迷惑をおかけしたのですが、特に、公聴会のプレゼンテーションのスライド作成では、深夜1:00にメール送信をすると、5:00に先生から修正が届くことが何度かあり、先生の貴重な睡眠時間を削ってしまいました。

山根先生には、臨床現場に生きる研究をすることの大切さを常に意識するように指導を受けてきました。また、研究に協力していただいた地域関係者の方にも、「研究結果は現場に生きる、結果を必ずフィードバックしてほしい」と言われ、臨床研究の大切さを改めて感じる機会になりました。

私は地域での保健活動を通して、精神認知機能に問題のある高齢者の事例の地域支援が進んでいない現状を感じていました。そのため、博士課程では、精神認知機能に問題のある高齢者の地域包括ケアに関する研究をしてきました。研究成果をもとに、滋賀県内のいくつかの市の地域包括ケアに関する調査やケア会議のコーディネーターをしつつ、地域包括ケアに関する研究を継続しており、4月からも客員研究員として京都大学に来させていただいています。

現在は、看護大学の地域看護学の教員になり、現場の保健師教育に関わることも多くなりました。博士課程で学んだことを活かして、現場に生きる研究を続けて行きたいと思います。

最後に改めて、これまでの研究を支えて下さった山根先生、山田先生とゼミ生の皆様、現場の協力者の皆様に、そして夫にも、紙面をお借りして御礼を申し上げたいと思います。



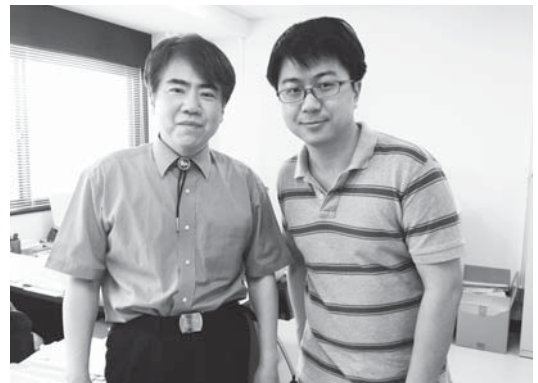


## 留学で取得した博士号

趙 朔

平成 26 年 3 月人間健康科学系専攻博士後期課程を修了致しました、趙朔（チョウ サク）と申します。この度、本紙面をお借り致しましてご挨拶申し上げます。

私は、中国から留学生として、平成 22 年 4 月に博士後期課程に入学し、十一元三先生のご指導のもと、研究活動に従事して参りました。修士課程まで、工学大学院で生体計測を学んだ私は、臨床的に貢献ができる研究を行おうと思い、「自閉症スペクトラム障害（ASD）の社会性の問題」に注目して、研究を行いました。これまで、ASD に関する知識が全く無かったため、研究デザインや研究方法の確保などには大変苦労しました。しかしながら、十一先生をはじめ大学院の諸先輩方のご指導のお蔭で良い研究成果を得られ、無事に博士号を取得することが出来ました。この場をお借りしまして、厚く御礼を申し上げます。



こうした研究を行っていく中で、ASD における障害特性の理解が深まり、研究スキルもうまく磨くことができました。さらに、様々な研究セミナーに参加できるチャンスがあり、これまでとは違う研究分野の研究者たちとも出会い、いろいろな方々の研究姿勢や研究視点を学ばせて頂き、広い研究の視野を得られました。また、研究室でも、後輩の論文指導にあたったことで、自分の論文執筆能力および研究能力の向上ができ、充実した研究生活を送ることが出来ました。

それ以外にも、留学生の私は、研究活動以外のさまざまな日常生活場面でも研究室の皆さんからご心配を頂き、大変お世話になっております。研究室での食事会、休憩中の淹れたてのコーヒー、季節に合ったさまざまな行事の中で、新たに知ったことや身につくことも少しずつ増えていき、楽しい留学生生活を過ごすことが出来ました。

この 4 月より、私は「NPO 発達障害研究推進機構」に研究員として勤務しており、引き続き ASD における様々な社会的、認知的問題への研究を行っています。今後、母国に帰り、京都大学で学んだ知識、および研究者としての意志を現地の皆さんにも伝えていきます。

今後ともにご指導ご鞭撻を賜りますように、宜しく願い申し上げます。

**人間健康科学系専攻・人間健康科学科  
平成 26 年度入学試験結果 及び 平成 25 年度修了・卒業者数**

**平成 26 年度 医学部人間健康科学科入学試験結果**

専攻・日程		募集人員	志願者数	合格者数	入学者数
看護学専攻	前期	70	159	74	71
検査技術科学専攻	前期	37	99	41	40
理学療法学専攻	前期	18	39	20	20
作業療法学専攻	前期	18	50	22	22
合 計		143	347	157	153

**平成 26 年度 医学研究科人間健康科学系専攻（修士課程）  
入学試験結果**

コース	募集人員	志願者数	合格者数	入学者数
看護科学コース 【高度実践助産学系（内数）】	28 【10】	31[5] 【18[0]】	23[5] 【10[0]】	21[5] 【9[0]】
検査技術科学コース	13	29[0]	20[0]	20[0]
リハビリテーション科学コース （理学療法学講座）	4	19[2]	14[1]	14[1]
リハビリテーション科学コース （作業療法学講座）	4	10[0]	6[0]	5[0]
合 計	49	89[7]	63[6]	60[6]

[ ]の数は、社会人特別選抜（内数）

**平成 26 年度 医学研究科人間健康科学系専攻（博士後期課程）  
入学試験結果**

コース	募集人員	志願者数	合格者数	入学者数
看護科学コース	15	14	5	4
検査技術科学コース		6	5	5
リハビリテーション科学コース （理学療法学講座）		9	5	5
リハビリテーション科学コース （作業療法学講座）		6	5	5
合 計	15	35	20	19

## 平成 25 年度 医学部人間健康科学科卒業生数

専攻	卒業生数
看護学専攻	62
検査技術科学専攻	35
理学療法学専攻	18
作業療法学専攻	19
合計	134

## 平成 25 年度 医学研究科人間健康科学系専攻（修士課程）修了者数

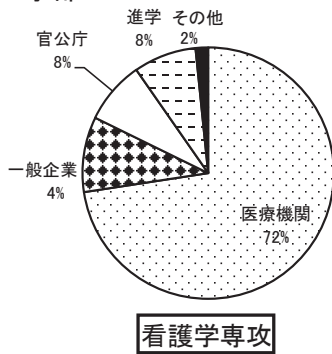
コース	修了者数
看護科学コース 【高度実践助産学系（内数）】	15 【10】
検査技術科学コース	17
リハビリテーション科学コース （理学療法学講座）	9
リハビリテーション科学コース （作業療法学講座）	6
合計	47

## 平成 25 年度 医学研究科人間健康科学系専攻（博士後期課程）修了者数

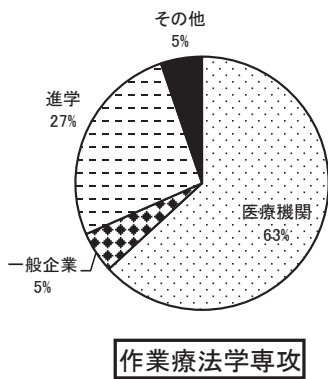
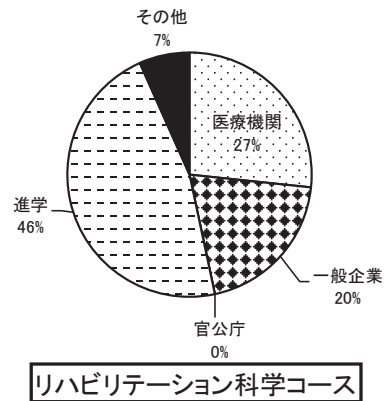
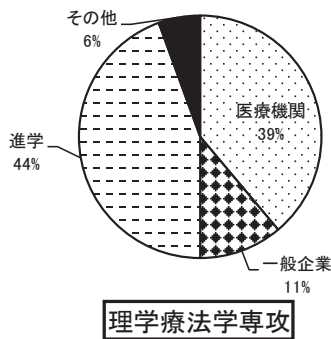
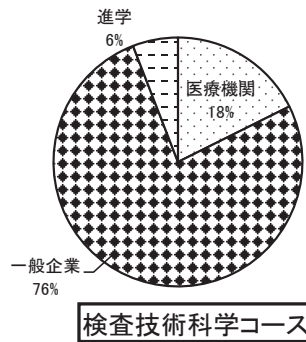
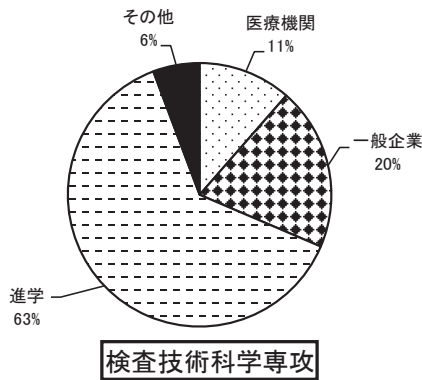
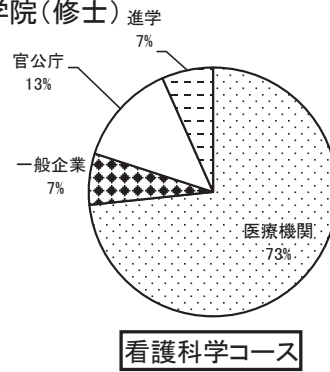
コース	修了者数
看護科学コース	2
検査技術科学コース	3
リハビリテーション科学コース （理学療法学講座）	4
リハビリテーション科学コース （作業療法学講座）	3
合計	12

平成25年度(平成26年3月)卒業・修了生の進路調査結果

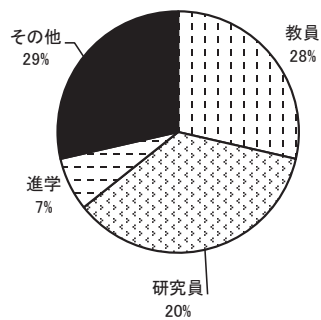
■学部



■大学院(修士)



■大学院(博士:コース全体)





## 人 事 異 動

発令年月日	職 名	氏 名	所 属	異 動 事 由
平成				
25.5.1	特定助教	浪田 健	CK プロジェクト	採用（北海道大学博士研究員より）
25.8.31	准教授	本田 育美	看護科学コース	辞職
25.9.30	助 教	福田 里砂	看護科学コース	辞職
25.12.1	准教授	上久保 靖彦	検査技術科学コース	採用（大阪大学大学院医学研究科助教より）
26.1.1	教 授	田村 恵子	看護科学コース	採用（淀川キリスト教病院看護部主任課長より）
26.2.1	助 教	小川 真寛	リハビリテーション科学コース （作業療法学講座）	採用（イムス板橋リハビリテーション病院リハビリテーション係長より）
26.3.1	准教授	西垣 昌和	看護科学コース	採用（東京大学大学院医学系研究科講師より）
26.3.31	准教授	赤澤 千春	看護科学コース	辞職
26.3.31	准教授	廣島 麻揚	看護科学コース	辞職
26.3.31	助 教	鈴木 和代	看護科学コース	辞職
26.3.31	助 教	久保田 正和	看護科学コース	辞職
26.3.31	助 教	山田 実	リハビリテーション科学コース （理学療法学講座）	辞職
26.3.31	教務掛長	杉本 重行	事務部	転出（エネルギー科学研究科教務掛長へ）
26.4.1	准教授	古田 真里枝	看護科学コース	採用（キングスカレッジ ロンドン リサーチフェローより）
26.4.1	助 教	西村 亜希子	看護科学コース	採用（京都大学博士課程より）
26.4.1	助 教	宮田 千春	看護科学コース	採用（自衛隊阪神病院看護師より）
26.4.1	特定准教授	小山 真紀	安寧の都市ユニット	配置換（工学研究科より）
26.4.1	事務長補佐 (兼教務掛長)	松下 裕之	事務部	配置換（学務部入試企画課課長補佐より）

## 日 誌 (H 25.4~H 26.3)

25.4.3	「安寧の都市ユニット」開講式	7.25	医学研究科専攻長会議
4.4	医系懇談会 病院協議会 修士課程1回生ガイダンス 博士後期課程1回生ガイダンス	8.1	(臨時)病院協議会
4.5	学部入学式 大学院入学式 学部新入生ガイダンス	8.7	執行部会議 オープンキャンパス
4.10	執行部会議	8.23	3年次編入学試験
4.11	医学研究科会議・医学教授会	8.27	大学院修士課程入学試験
4.16	拡大執行部会議	9.5	教務・教育委員会
4.18	教員会議 教授会	9.6	京大関係病院長協議会定例総会 全学教育シンポジウム
4.24	執行部会議	9.11	執行部会議
4.25	医学研究科専攻長会議	9.12	入試委員会 臨時教授会 医学部教授会 医学研究科会議・医学教授会
5.2	教務・教育委員会	9.13	大学院修士課程入学試験合格者発表 3年次編入学試験合格者発表 学生厚生支援委員会
5.8	執行部会議 病院協議会	9.17	拡大執行部会議
5.9	安寧の都市ユニット運営協議会 医学部・医学研究科将来計画検討委員会 医学研究科会議・医学教授会	9.18	安寧の都市ユニット運営協議会
5.14	拡大執行部会議 学生厚生支援委員会	9.19	教員会議 教授会
5.16	教員会議 教授会	9.20	医学部遺骨返還式
5.22	執行部会議	9.25	執行部会議
5.23	医学研究科専攻長会議	9.26	医学研究科専攻長会議
5.25	大学院説明会 [看護科学コース]	10.3	医系懇談会 教務・教育委員会
6.1	大学院説明会 [リハビリテーション科学コース]	10.9	執行部会議
6.3	第8回国立大学保健医療学系代表者協議会	10.10	医学研究科会議・医学教授会 医学研究科将来計画検討委員会
6.6	病院協議会 教務・教育委員会	10.15	拡大執行部会議
6.12	執行部会議	10.17	教員会議 教授会 ミッションの再定義・学内意見交換会
6.13	医学研究科将来計画検討委員会 医学研究科会議・医学教授会	10.18	医学部解剖体祭
6.18	創立記念日	10.23	執行部会議
6.20	拡大執行部会議 教員会議 教授会	10.24	医学研究科専攻長会議
6.25	学生厚生支援委員会	10.25	ミッションの再定義・文部科学省との意見交換
6.26	執行部会議	11.2	京都大学ホームカミングデイ
6.27	医学研究科専攻長会議	11.6	大学院博士後期課程入学試験
6.28	平成25年度全国国立大学法人助産師教育 専任教員会議	11.7	病院協議会 教務・教育委員会
6.29	大学院説明会 [検査技術科学コース]	11.9	安寧の都市ユニット公開セミナー 第26回健康科学市民公開講座
7.2	安寧の都市ユニット運営協議会	11.11	過半数代表選出選挙
7.4	医系懇談会 病院協議会 教務・教育委員会	11.13	執行部会議
7.10	執行部会議	11.14	医学研究科将来計画検討委員会 医学研究科会議・医学教授会
7.11	医学研究科将来計画検討委員会 医学研究科会議・医学教授会	11.19	拡大執行部会議
7.16	拡大執行部会議	11.20	11月祭前夜祭
7.18	教員会議 教授会	11.21	入試委員会 教員会議 教授会 11月祭(～24日)
7.24	執行部会議	11.25	安寧の都市ユニット運営協議会
		11.27	執行部会議

## 日 誌

11.28	学生厚生支援委員会 医学研究科専攻長会議 医学研究科会議	2.19	安寧の都市ユニット運営協議会
11.29	大学院博士後期課程入学試験合格者発表	2.20	リーディング大学院教授会 教員会議 教授会 (人間) 組織改革検討 WG
12.5	病院協議会 (人間) 組織改革検討 WG	2.21	学生厚生支援委員会
12.11	執行部会議	2.25	学部個別学力検査 (~ 26 日)
12.12	医学研究科将来計画検討委員会 医学研究科会議・医学教授会 教務・教育委員会	2.28	医学研究科専攻長会議 医学研究科会議・医学教授会
12.12	(人間) 組織改革検討 WG	3.6	病院協議会
12.17	拡大執行部会議 (人間) 組織改革検討 WG	3.7	教務・教育委員会
12.25	教員会議 教授会 (人間) 組織改革検討 WG	3.9	入試委員会 教授会 医学部教授会 (人間) 組織改革検討 WG
12.26	医学研究科専攻長会議 (人間) 組織改革検討 WG	3.10	学部個別学力検査合格者発表
12.27	(医学) 組織改革 WG	3.11	安寧の都市ユニット運営協議会
26.1.6	人間健康科学系専攻新年挨拶会	3.12	執行部会議 安寧の都市ユニット修了式 (医学) 組織改革 WG
1.7	病院協議会	3.13	医学研究科専攻長会議 医学研究科将来計画検討委員会 医学研究科会議・医学教授会
1.8	執行部会議	3.18	拡大執行部会議
1.9	医学研究科将来計画検討委員会 医学研究科会議・医学教授会 教務・教育委員会	3.20	人間健康 FD 講演会 教員会議 教授会
1.14	拡大執行部会議 (人間) 組織改革検討 WG	3.24	大学院学位授与式 博士後期課程・修士課程修了を祝う会
1.16	教員会議 教授会	3.25	学部卒業式 学部学生卒業を祝う会
1.18	大学入試センター試験 (~ 19 日)	3.26	執行部会議
1.20	(医学) 組織改革 WG	3.27	医学研究科専攻長会議 医学研究科会議・医学教授会
1.22	執行部会議		
1.23	医学研究科専攻長会議 医学研究科会議・医学教授会		
1.28	医系懇談会		
1.31	五〇会総会 (新年会)		
2.3	(人間) 組織改革検討 WG		
2.4	安寧の都市ユニット運営協議会		
2.6	病院協議会		
2.12	執行部会議		
2.13	医学研究科将来計画検討委員会 医学研究科会議・医学教授会 医学部教授会 教務・教育委員会		
2.18	拡大執行部会議		

## あとがき

本年も無事に広報をお届けすることができました。近年、大学の現在を感じて頂ければ幸いです。  
 大学や研究をとりまく環境は大きく変わっておりますが、多くの新任の先生方が着任し、また順調に博士号取得者を輩出していることをお伝えできることは、大変に嬉しいことです。

(山田重人)

〒 606-8507 京都市左京区聖護院川原町 53  
<http://www.med.kyoto-u.ac.jp/>